

NPO法人自然と緑

NPO 法人自然と緑 会報 2024 年 3 月 1 日発行 第 135 号

特定非営利活動法人自然と緑

代表者 伊藤 孝美

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

大阪市教育会館 (アネックス パル法円坂) 4 階

TEL : 06-6809-1700 FAX : 06-6809-2702

E-mail : info-sm@shizen-midori.org

URL : <https://shizen-midori.org>



自然大学の 29 期が始まります

NPO 法人自然と緑 理事長 伊藤孝美

この会報が届く 2 日後の 3 月 3 日、第 28 期自然大学の修了式が行われます。この 1 年間、自然大学が関係の皆様のお陰で無事修了できますことに感謝いたします。

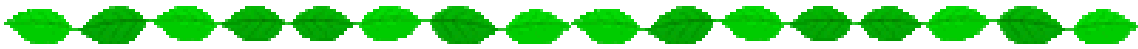
この 28 年間に亘る自然大学を溯ってみれば、1995 年に滋賀県立大学教授の依田恭二先生を初代学長として第 1 期が始まり、自然と緑理事長の石原忠一先生が二代学長、三代学長に大阪市立大学名誉教授の小川房人先生、四代学長の名古屋大学名誉教授の只木良也先生には 13 期から 25 期の 13 年間就任して頂きました。五代学長の京都大学名誉教授、渡辺弘之先生には 26 期から現在まで学長を務めて頂いております。いずれの先生方も日本の超一流の森林を中心とした自然生態系の泰斗であります。

NPO 法人自然と緑の自然大学の理念は自然生態系の学習と自然の循環系のなかに入らない (人工的に外部から持ち込まれ、循環系が許容できない) 物質により生じる環境問題への対処であります。

ここで最も長きに亘り学長を務めて頂いた只木良也先生の言葉を掲げておきます。

この NPO 自然と緑・自然大学での講座の主目的は、地球にしか存在しない「生命」というものを支えてくれる自然の仕組みを知ること、そしてその自然の仕組みを損傷することなく、人間たちがその生活に持続的に利用していく方法を学ぶところにあります。しかし、自然と称するものに対する認識は人それぞれ、つまり、自然の理解度は人によって当然違います。自然大学ではこれから 1 年間、専門の先生方による講義と実習によって、受講生の皆さん方に自然界の構造や働き・機能を学んでいただきますが、それは、自然に対する各人の過去の知識を整理し、もしその認識に誤りがあったときには、それを正すのに役立つはずで

そして 4 月から第 29 期自然大学が始まります。



◆ホームページが新しくなりました！

新しいホームページ (略: HP) は下記のアドレスでご覧下さい。

<https://shizen-midori.org> 検索の場合は「NPO法人 自然と緑」で検索して下さい。

なお、HP 内では Facebook も併設で、楽しい写真や情報満載です。そちらも是非覗いてみて下さい。

◆メールアドレスが新しくなりました！

新メールアドレスのアカウントは下記になりました。

info-sm@shizen-midori.org の登録をお願いします。



— 135 号目次 —

p 1	自然大学の 29 期が始まります	自然と緑理事長	伊藤孝美
p 2 ~ 3	渡辺弘之の未確認事件簿 (17) 芦生にシロクマ (白熊) が本当にいる？	自然大学学長	渡辺弘之
p 4	地元の巨樹・古木 (12)	自然と緑理事	竹内一郎
p 5	さいとうさんの“話のタネ” (63) 「兵庫県立人と自然の博物館」	自然と緑前理事長	齊藤 兎三
p 6	27 期自然大学 山田池実習—冬鳥の観察 感想文 (抜粋)		27 期自然大学受講生
p 7	門真市、古川沿いのクスノキ老木について	自然と緑理事長	伊藤孝美
p 8	活動報告／編集雑記	自然と緑	会報編集部

渡辺弘之の未解決事件簿 (17) 芦生にシロクマ (白熊) が本当にいる？

自然大学学長 渡辺弘之

ツキノワグマ研究

京都大学芦生研究林 (当時は演習林) に赴任 (1966~72) していたとき、スギ・ヒノキの樹皮を剥ぐツキノワグマの生態研究をした。クマを捕る檻を仕掛けて、1968年9月11日、体重約50 kgのやや小さい雄が入った。誘引剤はペンキであった。それまでに捕獲したものにくらべ、この個体は小さかった。宿舎近くに運び、3ヶ月ほど飼ったのだが、問題は餌だった。リンゴ、ナシ、ブドウ、カキなどの果物を、それもあちこちのスーパーを回って傷んだもの、廃棄するものをもって歩いた。それも数日置きにもらいに現れるのだから、「店の裏から来い」といわれた。

シロクマ(ホッキョクグマ) (アラスカ、アムステルダム空港) ⇒

果物は腐りやすい。かなりの割合で廃棄されることがわかったが、一番多いのはグレープ・フルーツだった。ダンボール箱をそのままもらうこともあった。ところが、クマはこれをまったく食べなかった。すぐにカビが生え、白いソフトボールになった。もちろん、小売店も回ったのだが、ここでは100円とか200円とか要求された。いい若者が捨てる果物をもって歩いたのである。理由は話が長くなるのでいかなかった。

ところが11月に入り寒くなると、クマはどこが頭かわからないほど、まん丸くなった。まん丸くなることで体表面積を減らしていたのである。こんな時、京都大学霊長類研究所の河合雅雄教授のグループがニホンザルに発信器 (テレメーター) を装着し、その行動を研究しているというニュースがあった。今、私が飼っているこのクマに発信器を着けて放せば、冬ごもり穴まで追跡できると考えた。

発信器装着

著名な河合先生のお名前はもちろん知っていたが、直接お会いしたことはなかった。私のことなど多分知らなかったであろう。しかし、電話した。今思ってもよくそんな度胸があったと思う。発信器装着はニホンザルでも初めてのことで、サルにはリュックのように背中に背負わせたが、クマにはどう装着するか、発信器もまだ市販されていなかった。ともかく、「クマを霊長類研究所へ送れ、それから考えよう」といつてくれた。拒否されるのでなく、「考えてみよう」といつてくれたのである。すぐに、クマを霊長類研究所のある犬山まで運んだ。実はずっと後になって知ったのだが、河合雅雄『森の歳時記』(平凡社、1990)の中に、クマを引き受けて困った時の様子を書いてあった。

霊長類研究所の東滋さんが乗り出してくれた。発信器を装着するのに、まずクマを麻酔させないといけない。今では麻酔銃もあるが、どんな麻酔薬があるのか、どのくらいの量を注射するのか、私にはまったく知識がなかった。春、戻ってきたクマは一回り大きくなっているように思えた。

私が撮った芦生のクマ⇒

発信器は愛知県立大学の安藤滋助教授が試作したもの、送信器自体の重量はわずか4 gだが、それをケースに詰めて9 g、送信アンテナは40 cmのリード線つけたホイップ・アンテナ、バッテリーは単1電池8個を繋いで重さ1.3 kgの円形になった。これを首につけた。クマが首に浮き輪をつけているようだった。

1969年6月11日午後3時、当時の林道終点の扇谷近くの草地で檻の戸を開いてクマを放した。すぐ近くの天然林に入った。追跡は当時、京都大学大学院理学研究科の大学院生であった水野昭憲、花井正光、小川巖さんたちが引き受けてくれた。2班に分かれ、定時刻にクマからの電波を受信する、2つの班の入力電波の交点にクマがいるということになる。

3日で行方不明

1日目、放逐後約2時間で600 mの移動、2日目、上谷・下谷合流点付近を移動、3日目、わずかな移動、ところが4日目以降、電波をキャッチできず行方不明、8日目、演習林との境界を越えた滋賀県朽木村キトク谷



からの電波をキャッチする。その後、福井県側・滋賀県側も広範囲に搜索するも反応はなかった。演習林内での移動の範囲は0.15 km²で、案外狭い範囲であった。活動の止まる時刻は夕方4時～5時15分であったが、あとで考えると、追跡グループは1日中、山に入っている、夕方には疲れ、お腹もへってくる。クマの方も動かない、ここでお互いにお休みと考えるのも当然だった。

しかし、13日夕方までいたものが、14日の朝にはいなかったのである。13日の夜、あるいは14日の朝、大きく動いたということだ。けものの行動は薄明薄暮に活発になるといわれている。夜・早朝の見張りを軽く見たのでは思っている。実際、捕獲檻の扉が落ちると止まるデジタル時計をとりつけ、クマが檻に入った時刻を記録したことがあったが、それは午前5時33分から8時36分、午後5時32分から11時20分であった。

直接観察しにくい獣の行動調査に発信器（テレメーター）の利用はきわめて有効である。私が捕まえたクマに発信器をつけて放し、その行動を調べたのである。もちろん、発信器の開発、麻酔方法、大きな檻に入ったクマの運搬、放逐後の追跡に多くの方の参加・協力をいただいている。とても、私一人のできる研究ではなかった。



自動撮影装置で撮った芦生のクマ(小泉博保)

日光・男体山

1978年7月、表日光の男体山と女峰山に囲まれた荒沢で東京農工大学農学部の羽澄俊裕・丸山直樹さんのグループが2頭のクマに発信器を着けて放逐した。この研究メンバーの一員だったので応援に行った。谷底にいて、数日動かないという。私が到着後もクマを刺激しないように、尾根を歩き、まちがいなく谷にいることを確認した。しかし、しびれをきらし、様子を見に行こうということになった。

谷まで下り、ゆっくり進む。確実にクマがいて、それに近づくのである。受信音が一段と大きくなる。心臓の鼓動も大きい。グループは気が付くといつの間にか一塊になっている。樹木は少なく見通しはいい。木の上にはいない、地表にも動くもの、黒いものはいない。まちがいなく発信器を付けたクマがいるはずなのである。その時、私はみた。そこにクマに着けた首輪があった。

毎日、尾根を巡ってこの谷底からクマが動かないと確認してきたのだ。クマから外れた発信器が発信を続けていたのだ。全員の緊張が溶け、一斉に歓声があがった。

日本にシロクマがいる？

信じない人もいるだろうが、日本にシロクマ（ホッキョクグマ）がいる。動物図鑑ではそうになっている。きわめて稀に流氷に乗って北海道と新潟に来た記録があるらしい。しかし、北海道はともかく、新潟というのは疑っていた。新潟沖には対馬暖流が流れ、とても流氷は来ないからである。この根拠は鈴木牧之『北越雪譜』（天保7年1836）だと気づいた。この中で猟師が八海山（南魚沼市、標高1,778 m）で白熊を捕らえた、珍しいので見世物として方々へ連れていかれたが、毛は雪のように白く、眼と爪は紅色だったと書かれている。ツキノワグマのアルビノ（白化型）にまちがいない。、シロヘビ、白いカラスや白いスズメと同じような現象だ。まちがいなく、ツキノワグマのアルビノである。

芦生のシロクマ

2021年3月、芦生研究林開設100周年記念シンポジウムに招待された。芦生の昔話をしてくれという。100年前の話は出来ないので、ここに常駐した50年前の生活の思い出、日本ではじめてクマに発信器をつけて放し、行動調査をしたときの話をさせてもらった。3日で行方不明になったこと、調査は半分失敗だったことを話したのだが、つい調子に乗って、「あれから50年、きっと巨大なクマになっているはず、それも歳をとり白髪、シロクマになっています。檻に入れられ、麻酔薬を注射された怒りは消えておらず、まだ、怒っています。芦生へ行くときは巨大なシロクマに気をつけて下さい」といってしまった。

記念シンポジウムの静粛な雰囲気の中での勇み足であった。帰宅すると、リモートで講演を聞いていた知人から、「渡辺節、聞きました」とメールが来た。

それでも、生きていて欲しい、どんなに大きくなっているか、本当に白髪のシロクマなのか会ってみたい。

【参考書】 渡辺弘之：ツキノワグマの話 日本放送出版協会（1974）

河合雅雄：森の歳時記 平凡社（1990）

河内長野市 長野神社のかやのき（榎木）（大阪府河内長野町 8-19）

幹周り 約4 m、樹高 約17 m 大阪府指定天然記念物 長野神社本殿は国指定の重要文化財

長野神社は、自然大学・ステップアップ講座の金剛山野外実習の最寄り駅である近鉄長野線・南海高野線河内長野駅より南西に徒歩5分のところに在ります。長野神社の立札には、「長野神社 旧長野・古野の一部を氏地とするこの神社は素盞鳴大神を祀っている。また長野恵比須としてもよく知られている。江戸時代中期の頃までは、木屋堂宮・牛頭天王宮とも言われ、明治元年に長野神社と改称された。本殿は重要文化財に指定され一間社流造・正面に千鳥破風と軒唐破風をつけた檜皮葺で室町時代末期の建築と考えられている。秋祭りの10月11日には古くから伝わる松明神事がとり行われる。これは神社境内に容易された直径1 m 50 cm・高さ約5 mの大



長野神社 本殿

松明に点火する荘厳な祭りである。境内の一角にあるカヤの木は大阪府の天然記念物である。昭和60年3月 河内長野市」とあります。本殿には素盞鳴大神（牛頭天王）、恵比須社は事代主大神、五社は熊野宮・多賀宮・八幡宮・春日宮・高良宮、天神社は菅原道真公と祭神が祀られ、中世の信仰の隆盛が感じられます。



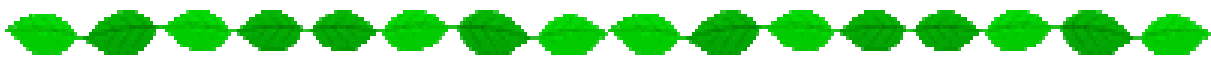
長野神社かやのき

かやのきの立札は「大阪府指定天然記念物 長野神社のかやのき 昭和47年3月31日指定 いちい科の常緑喬木であるこの木は雌雄異株であり、針葉樹のうち特に進化したものとして、植物学的に価値の高いものである。我が国にのみ自生し これに類似した木はアジアとアメリカ太平洋岸に分布している。この『かやのき』は雌株であり、幹まわり約4 m、高さ約17 mで生育も良く府下では最大級である。平成3年9月10日設置 大阪府教育委員会」と表示されています。かやのきは縄文時代から実を食べ、飢饉に備え保存食料とし、実から油を搾り食用・灯火などに使っていたそうです。木の質は、油が多く適度な弾力と堅さで重厚さがあり、木肌はきめ細かく木目も美しく、淡黄色の色あいも良く、耐久性も優れている等の特長があります。昔は建築材・船舶・風呂桶等に幅広く使われていました。現在は碁盤・将棋盤の最高

級品で知られ、高価なものは数百万円以上するそうです。かやのきは成長がきわめて遅く、碁盤づくりに必要な太さ直径1.1 m以上になるには300年以上かかるそうです。かやのきは成長が難しいため希少であり絶滅に近い木とも言われています。きれいに整備された長野神社の境内にはかやのきの他に河内長野市保存樹木指定のイチョウと2本の楠の巨樹があります。これらからも神社の長い歴史の重みがかがえます。有志により将来の神木になることを願い榊が植樹されています。長野神社を見て、河内長野市の人々は地元の歴史と将来の自然環境をたいへん大切にしていると感じられます。

最後にかやの花言葉は「努力」「忍耐」「寛容」です。

以上



【これなんだろう・何故だろう】



この写真の樹木は熱帯植物のインドボダイジュ（印度菩提樹）です。仏教三大聖樹の一つで、釈迦がその下で悟り（菩提）を開いたとされる樹木で、インドの国花となっています。

ところで、写真の葉をよく見ると、葉の先端が細長く垂れて、尖っています。何故でしょうか？

（答は最終ページをご覧ください）

さいとうさんの話の種(63) 「兵庫県立人と自然の博物館」

前自然と緑理事 長 齊藤 侑三



春夏秋冬の看板

「兵庫県立人と自然の博物館」を2023年12月に4回案内した。ここは平成4年(1992年)10月10日に「人と自然の共生」をテーマに開館した。

開館から30年で展示物が多くなり令和4年(2022年)に「コレクションナリウム」を別棟で開館し、鳥や昆虫動物の剥製などを収容展示している。この中に入るとタヌキが「春夏秋冬」の看板で迎えてくれる。

今年は「春夏秋冬」だと案内した。秋がないから「あきないちゅう」江戸時代に流行った「判じ物」で、なぞなぞのようなものだ。この博物館には“遊び心”がある。

2回目の時にコレクションナリウムでスッポンとアカミミガメの甲羅の展示を見つけ「甲羅の裏を見せてほしい」というと「手にとって見てください」といわれた。普通「触らないで」というところが多いので「えっ触っていいの」と思った。

カメは敵から身を守るために甲羅の内側に肋骨がついており「外骨格(皮膚骨格)」と言う。外骨格は「外に骨をもつ生き物」で、カメ以外に貝類、カニ、エビ、ウニ、ヒトデなど多くの甲殻類や昆虫に見られる。人間は背骨が体内に入っている「内骨格」だ。

入館3回目の時には、カメ甲羅の上の棚に「タコの貝」があった。私が20代の頃、同僚6名で佐渡島一周旅行に行ったとき「民宿の主人にもらって丁寧に包んで帰ったが殻が割れていた、そのくらい薄い殻だ」と言い、あの中にタコが入っていると云ったが、タコの名前は忘れていた。受付の人に「タコの名前は？」と尋ねると調べてくれた。仲間が携帯で写真撮影して「アオイガイ」と分かった。館を出て公園に向かう途中、職員の方が追いかけてこられ、みんなが“アオイガイ”を触らせてもらった。



4回目の時には“アオイガイ”が見やすいように1段棚を下げて展示してあり「アオイガイ」と表示されていた。表示に「名前に“貝”があるがタコ的一种」と書いてあれば、見学者もびっくりするだろうと思った。調べると「黒っぽい貝が“タコブネ”で、白い貝は“アオイガイ(カイダコ)”で殻の大きさは20cmで貝殻をつくるのは雌だけで、貝殻で卵を守るためと考えられている。雄は雌の1/20の大きさしかない」と書いてあった。オスは小さくなっている。



アオイガイ

4階にアンモナイトの復元模型のポスターがあった。アオイガイによく似ているので先祖がアンモナイトかと思ったが違った。アンモナイトはイカやタコの近縁だといわれているので先祖が親戚に近いようだ。ひよっとしたらアンモナイトも雌だけが殻を持っていたのではないかと想像もふくらむ。

3階にコウノトリの巣やイヌワシの巣がある、イヌワシの巣は10年で5回使った厚い巣だ。イヌワシやコウノトリは大きな鳥で岩の上やマツの幹が台風やカミナリで折れマツの枝が車輪状で頑丈なので巣を作る。巣づくりの場所がなかなか無いので同じ巣を何年も使う。松葉を上になべているのは枝より柔らかいのと手近にマツの枝が確保できるからだろう。ここの職員はいつも親切に対応してもらった、素晴らしい博物館だ。「自然と緑の自然大学」で学んだ人は是非、見学してほしいところだ。写真は全部“人と自然の博物館”の展示物だ。



コウノトリの巣



イヌワシの巣



○鳥の優しい鳴き声、囀りを聴き、水辺の鳥たちがのんびりと羽を休めている姿を見ると癒されます。静寂な山や森で聴くとより一層自然の中に溶け込み、自然と一体となったような感じがします。大きな鳥が大空を悠然と飛ぶ姿、波打つように、素早く飛ぶ姿も魅力的で美しいと思います。冬のこの時期は、落葉樹の木々の間を飛び回ると見つけやすくなるものの、梢の間を素早く行き来し一所に留まっていけないので、双眼鏡で追うと既になくなって見失ってしまいます。餌を啄んでいるところや色々な仕草を観察できるようになったり、枝鳴き声、色、模様などで鳥の名前が分かるようになれば、もっと興味も湧き楽しくなってくるだろうと思います。

○大阪に住んでいながら山田池の存在は知らなかったし、野鳥観察も初めての経験である。知っている鳥の名前をメモしてみた。十五、十六・・・二十はいかなかった。佐々木先生のテキストによると9千から1万種確認されているらしい。にもかかわらず二十もの名前が出てこないとは鳥に気を留めることなく過ごしてきた証拠であろう。今回の授業で双眼鏡で鳥を追って見ると意外と身近なものに思えた。鳥は一部の恐竜から進化して生き残った生物。見た目からでは想像するのは難しい。恐竜は人間よりはるかに大きい、なのに周りの鳥は小さいくて可愛い、この変化はどのような経過をたどったのか興味のあるところである。また羽毛についての説明でダウン(綿羽)とフェザー(半綿羽)があるとの説明ですが、この違いがよくわからない。機能や形がどのようにちがうのでしょうか。

○強烈な寒波で危ぶまれた観察会でしたが、奇跡の冬の晴れ間のもとタップリと山田池公園を楽しめました。幹と枝だけの裸になってしまった樹形の魅力を再発見したり、ギンドロ・ヒマラヤザクラ・ナギイカダなど珍しい植物の観察、シャシャンボ・サンシュユの実を味わったりと多様な楽しみ方ができました。冬鳥観察では、全体で32種、そのうち自分で確認できたのは21種でした。普段から見慣れているメジロ、モズ、ハクセキレイ、オオバンなども双眼鏡を通してみると新鮮でした。カイツブリ、カワセミ、シメ、コゲラは初めて双眼鏡で捉えられ感動しました。佐々木先生が望遠鏡で見せてくださったアオサギの顔のドアップも迫力満点でした。午後の講義で、鳥は今を生きている恐竜類、エナガの子育てには『ヘルパー』が付く、ハシビロガモが集団で回転し餌のプランクトンを集めて食べるという話は興味深かったです。スズメ・ツバメが減ってヒヨドリ・ムクドリが増えているが、特に弊害は今の所はない、という事なので安心しましたが変化し続ける状況に常に関心を持ちたいと思います。鳥の聲も聴き取れず姿も見えにくくなり野鳥観察は諦めていましたが、参加して「やさしいきもち」でまた双眼鏡を覗きたいと欲が出てきました。ありがとうございました。

【回答】質問らしいところでは、二点あったかと思えます。一つ目は体の大きな恐竜類が減った中でその末裔の鳥類が生き延びたわけについて。二つ目は羽毛の種類についてでした。 泳ぎ回るカモ類

一つ目については、いわゆる恐竜絶滅が巨大隕石の衝突によるといわれ、とてつもない環境の変化がありましたが、大きな体ではエネルギー消費も多く、移動や採餌などの変化に適応できなかったことが挙げられます。そして当時小型の鳥類や小型の哺乳類がいたのですが、エネルギー消費が少なくまた移動に最適な地下生活や飛翔能力があった事が生存への大きな要因であったと考えられ、生き延びたのちの適応放散により多くの種に分化したのが現生種です。

二つ目は羽毛の種類ですが、ご質問のダウンとフェザーの違いは羽軸の有無です。今回はあまり多くの事は説明できませんでしたが一口に羽毛といっても数多くの種類があり、無駄なくそれぞれに役割があります。このことを詳しく解説するには多くの紙面と多くの時間を要しますので、参考図書として『原寸大写真図鑑 羽 増補改訂版』(文一総合出版)などを参照ください。

多くの受講生の方に「空飛ぶ恐竜」に興味・関心を持っていただけたことは幸いです。一緒に人生を楽しみましょう。



水鳥の説明をする佐々木講師



冬鳥を各班で観察する



門真市、古川沿いのクスノキ老木について

NPO法人自然と緑理事長 伊藤孝美

1990年(平成2年)に、環境庁(現在環境省)が全国の都道府県に指示し、幹廻りが3m以上の巨樹の実態を明らかにするため「巨樹巨木林調査」を行った。大阪府ではその調査を私が担当したが、その結果、大阪府には約300個体があることが解り、その中の4割近くがクスノキだったと記憶している。

そのクスノキの多くが大阪の低平地である平野部に多く見られたが、門真市や寝屋川市、守口市の、粘土層である沖積層に何故多くあるのか不思議に思っていた。

普通、粘土層のある沖積層では樹木の根が呼吸できないため枯れることが多いが、クスノキ巨木が成立している場所は、門真市の古川や寝屋川市の寝屋川に沿っている所だったのである。

古くには淀川の支流であった古川は度々氾濫が起きた川で、川が曲がりくねった場所の外側には土砂が堆積して土塁状の堤防が出来ているはずであり、土塁の上に生えたクスノキは十分大きく成長できるはずである、と考えた。

昨年秋にそれを確かめるために寝屋川市の「萱島の楠」から古川を南下して三島神社の「薫蓋樟」までクスノキの巨樹を訪ねた。



古川は堤防が高く天井川になっている

【萱島の楠】

寝屋川の川沿いの堤防の上に樹齢700年と推定されるクスノキがあるが、京阪本線の高架・複々線化の為ホームと屋根を楠が突き抜ける形で駅が作られた。楠の隣の駅の下敷地に京阪電鉄が社殿を造営・寄進し、1980年7月、「萱島神社」として再興された。

【島頭天満宮の楠】

寝屋川と古川がY字に接するところにある天満宮で、境内には周囲4mを越すクスノキが、門真市の保存樹木として保護されている。

【宮野町堤根神社の樟】

南流する古川が西へ曲がる南堤防状の所の、門真市宮野町の堤根神社(つつみねじんじゃ)は、『日本書紀』仁徳天皇の記事に、「天皇は洪水や高潮を防ぐことを目的として、淀川に茨田堤を築いた」との記述がある茨田堤の鎮守として創建されたもので、延喜式神名帳に記載される式内社である。社殿の近くに茨田堤と伝えられる堤の一部が残り、その上に樹齢500年以上の樟が生えている。



伝茨田の堤上の樟

【願徳寺の楠】

西流する古川が南へ曲がった西側にある願得寺は、大阪府門真市御堂町にある真宗大谷派の仏教寺院で、境内には門真市保存樹林であるクスノキ巨木がそびえている。

【稗島の楠】

古川の西側堤防上にある樹齢400年といわれるクスノキの巨樹で、府の天然記念物に指定されている。樹勢は旺盛で、主幹は根元から約2mのところまで4枝に分かれ、川面を覆うように枝を広げている。民家の庭にあるクスノキの巨樹として非常に貴重なものとなっている。

【稗島の堤根神社の楠】

上記稗島の楠の西に接した台地状の土塁の上に建つ神社で、郷社・三島神社に合祀されていたが、昭和21年に三島神社から独立して旧地に復興された。

社殿に向かって右に、クスノキの巨木が生育している。



国天然記念物「薫蓋樟」

【三島神社の薫蓋樟】

三島神社は古川の南東300mとやや離れているが、台地状の土塁(石垣で囲っている)上にある郷社である。薫蓋樟は、境内に生育するクスノキの巨木で、推定の樹齢は1000年以上とされ、1938年(昭和13年)に国の天然記念物に指定された。大阪府内では最大であり、日本国内でも有数のクスノキの巨木とされる。

【御礼】いつもありがとうございます。(順不同、敬称略)

<切手、ハガキ、現金などのご寄付、他>

12/26 M・M ピンセット 01/20 森島 葉書・切手

01/24 飲み会有志 ¥8,200 01/25 自然と飲み会有志 ¥6,560



【4ページの答】この細長く尖った先端は、ドリップチップと言います。熱帯ではスコールが度々襲ってきますので、葉についた雨水を早くに滴り落とす必要があります。その為、雨水の滴が早く落ちるように先端が細長く尖っているのです。



ドリップチップのある他の植物例 左からアリガ (マメ科)、羊蹄木 (マメ科)、モンキーポッド (サガリバナ科)

自然と緑の活動報告 2023年12月～2024年2月

◇ 12/14 (木) パソコンサポートの設定	06 人
◇ 12/17 (木) 近江馬ヶ瀬山ふれあいの森定例活動	19 人
◇ 12/18 (月) ステップアップ講座 2024 年度の日程打合せ	04 人
◇ 12/19 (火) 大阪経済法科大学里山整備	07 人
◇ 12/23 (土) 地学的むかし散歩「第 6 回」	19 人
◇ 01/08 (月) 自然と緑 4 役会議 (メール会議)	06 人
◇ 01/11 (木) 1 月理事会	14 人
◇ 01/13 (土) 自然と緑の自然観察会「清荒神～中山寺」	27 人
◇ 01/14 (日) 斑鳩町の里山整備	13 人
◇ 01/16 (火) 大阪経済法科大学里山整備	06 人
◇ 01/21 (日) 武庫川探訪自然観察会「第 8 回」	19 人
◇ 01/25 (木) 大阪市教育会館新築工事 事務所レイアウトヒアリング	01 人+11 人
◇ 01/28 (日) 第 28 期自然大学野外実習「昆陽池」	39 人
◇ 01/28 (日) 近江馬ヶ瀬山ふれあいの森定例活動	13 人+19 人
◇ 01/31 (水) ドコモ関西森林保全活動打合せ	01 人+02 人
◇ 02/04 (日) ステップアップ講座「大阪公立大学附属植物園」	25 人
◇ 02/06 (日) 2023 年度 第 4 回企画グループ打合せ会議	08 人
◇ 02/08 (木) 2 月理事会	14 人
◇ 02/10 (土) 斑鳩町の里山整備	14 人
◇ 02/18 (日) 地学的むかし散歩「第 7 回」	26 人

NPO法人
自然と緑
ダウンロード方法



上記QRコードに
アクセスして下さい

★編集雑記
☆昨年二月二十二日、大阪市北区の、大川端で、梅の品種「白加賀」(大阪の開花標準木)が八分咲きでした。
☆今年二月二日、大阪城公園の梅園を見に行きました。梅の白花品種「白加賀」が二分咲き程度でした。
☆大阪管区気象台は、梅の開花宣言を行い、例年より十一日早い開花とのことでした。
☆梅も桜も前年の夏に花芽が作られます。しかし、花芽は翌年開花するため休眠します、花芽だけでなく葉芽も休眠します。
☆秋が過ぎて冬になり、低温に曝されると「休眠打破」という作用が起こり、花芽が芽(目)を覚まします。
☆その後の気温が高ければ、目を覚ました花芽は開花に向けて進みます。
☆昨年の大阪は平均気温が約一℃平年に比べ高い値となり、十二月になっても暖冬が続いたため、休眠打破がうまく行われたのか少し疑念が残っています。
☆梅は咲いたが、桜はどうか(？)かいな。(ワンワン)